

## 大蔵善行七十賀宴と時平

——寛平延喜期の文人の周辺——

工 藤 重 矩

(一九七八年九月六日 受理)

延喜元(901)年九月、左大臣藤原時平の城南の別第に大外記大蔵善行の七十算を賀す宴が設けられ、詩が賦された(日本紀略)。その詩、十九名二十五首が「雑言奉和」(群書類従所収)に収められている。

この賀宴の性格については、正月に道真が左遷されたばかりのことであり、集まった者たちは反道真派の文人で、道真追放の宴、善行学閥誇示の宴であると、一般に理解されていた。ところが、最近の後藤昭雄「大蔵善行七十賀詩宴について」(古代文化 昭和50年7月)によれば、善行と紀長谷雄等この宴の出席者との関係は、詩序には「趨庭之生」と、詩には「門弟子」と称されているが、その師弟関係の実質は単にかつて何かの折に善行の講筵に列したという程度にすぎず、私塾や大学寮における強固な一営家廊下の如き一関係ではないであろうという。

氏の論証は詳細で、その結論は肯定すべきであり、この賀宴の性格や参加者たちの参加資格についても、新たに検討しなければならなくな

後藤氏は、宴の性格については、

善行が時平に近かったこと——善行が基経・忠平に『撰関侍読』として侍していること(二中歴卷二)から推して、時平の侍読でもあったことは、十分の可能性をもつことである。長谷雄の序に「丞相も昔また道を問ひしこと有り」というのはこのことをいうと考えられるが、このような関係にあった時平が、あたかも七十歳を迎えた善行の頌寿と正史(三代実録—引用者注)編纂の慰労とを併せ行うべく賀宴を別第に張った。この美挙に應じて、かつて善行の経書の講筵に列った人びとも参加した。

と、最も基底的な所で筆を抑えている。当時の文人社会は、後藤氏の諸論文に説かれるように、分派抗争も激しく政治的要素も絡んで、甚だ複雑な様相を呈している。それだけに、この宴についても慎重でなければならぬのだが、また一方で「史に曰はく、一時の名士畢く集まる」(江村北海 日本詩史)というべき文人を集めている以上、この賀宴の文壇的位置付けはぜひともなされねばならない。後藤氏の結論から出発して、この問題にあえて一步を踏み込んでみたいと思う。

## 二

賀宴の参加者は、「雜言奉和」によれば次の通りである。

主催者左大臣時平、主賓大外記大藏善行の他には、詩序に名を挙げられる六人の弟子として、大藏卿平惟範・右大弁藤原忠平・右中弁藤原興範・尾張權守平伊望・越前介三統理平・左大弁紀長谷雄、そして以下十三人の列席者（列席者は十三人に限らないであろうが、名が判明するのは詩を献じた者だけである）——大舍人頭惟良高尚・文章博士三善清行・治部大輔高階茂範・權左中弁藤原菅根・前下野守藤原春海・大内記小野美材・讃岐權介橘澄清・刑部大輔平有相・能登權介物部安興・散位大江千古・文章生紀淑光・学生笠夏蔭・大和少掾大藏是明である。

右の者達がいかなる資格で賀宴に参加しているのかをまず考えよう。それには詩序ではっきり「趨庭之生」（弟子のこと）とされている六人から始めるのが順序であろう。

長谷雄ら六人の参加が善行の弟子であったことに拠るのは明白なことであるが、弟子であったということは必要条件であって、それだけでは十分でない。しかも、弟子とはいえ、その実質が単なる一時的受講者にすぎないとなれば、数多い弟子（詩序に在朝之士伝受其業冠繁生徒不可勝数という）の中から何故にかの六人が選ばれたかが問題である。

六人が選ばれた事情は、表面的ながらも詩序に記されている。便宜詩序の全体をここで見ておこう。

延喜元年秋、左丞相命ニ詩酒於城南別第一。賀ニ外史藏大夫ノ懸車之齡一也。大夫、經籍ヲ為レ心ト、勸誘シテ不レ倦マ。在朝之士、伝ニ受スルモノ其業一冠ニ繁ク、生徒ハ不レ可レ勝レ数フルニ。丞相昔亦有ニ問ヒシ道之事一。

まず、左大臣時平が善行の懸車の齡（七十歳）を賀すために詩酒の宴を設けたことを述べ、次いで、善行には多数の生徒がおり、時平も昔教えを受けたことをいう。これだけのことを記しておいて、記述は遡ってこの宴が計画された時点にまでもどる。

從容トシテ曰ク、古人不レ言ハ平、一日為レサバ師ト終身為レト父ト。縦ヒ不レト如レ父ニ、何ゾ忘レシヤ為レルヲ師。方今、觸レテ時ニ之感、旧意難シ禁ジ。七旬之秋、豈ニ空シク過ケザン乎。

時平が古人云々と言いつたのはいつのことであろうか。宴が九月であることは、「日本紀略」の九月十五日と二十六日の間に「其日、左大臣於城南水閣賀大藏善行七旬算、賦詩」の記事があることで知りうる。三統理平の詩に「相逢尚齒約窮秋」の句があるが、これからすれば、相違うた時にはまだ「窮秋」（九月）にはなっていないからようである。また賀宴が「三代実録」編纂慰勞を兼ねていたとすれば、時平が賀宴のことを言い出したのは、編纂が終りに近付いた七月か、撰進の終わった八月上旬（八月二日撰進）であろう。ただ、八月では編纂作業は全て完了しており、九月までは日数もあわただしいように思う。編纂が終りに近づいた七月と考える方がよいであろう。そのような七月のある一日、時平をはじめくつろいでいた時のことであろう。

干時、陪ニ閣下ニ者、藏部尚書平惟範・右大丞忠平・右中丞興範・尾州大守平伊望・越州別駕統理平及發昭等、總テ有ニ六人。皆是レ旧日趨庭之生ナリ。各々相ヒ視テ曰ク、恩之至也、道之榮也ト。

時平が宴を催そうと言いつたとき、閣下に陪していたのは惟範ら六人だという。どのような事情でこの六人が陪していたのかは明らかでない。編纂作業に関係あるかとも思うがなお不明である。さて詩序の文字どおりに解すれば、六人のみが陪していた如くであるが、おそらくは他

の者たちも居たにちがいない。詩序を書いた時点での修辭であろう（なお後述）。

丞相又曰、達スル者雖多シト、近クハ得ニ六人ヲ。与レ余相ヒ共ニ、  
將ニ勸ニ七盃之酒ヲ。声出デテ響随ヒ、情感自カラ然リ。即チ各々從ヒテ  
行酒之役ニ、以テ申ニ献祝之情ヲ。

「善行の弟子には優れた者は多いが、最近では諸君ら六人がいる。余と共に七盃の酒を勧めようではないか」という左大臣の言葉で、六人は行酒の役を勤めることとなったのである。この点——時平のよびかけで六人が決定されたということが、この賀宴を考える上では重要な点である。

六人というのも、七句を祝う「七盃之酒」にあわせて決められている。始めに、七句、七盃の「七」があつて、それから時平をさし引いた残りが「六」である。「六人」より多くても少なくてもいけないのである。<sup>(88)</sup>「近くは六人を得たり」という詩序の言葉は、それ故、文字どおりにはとりがたい。後にも触れるが、六人のうち、平伊望は時に二十歳であるが、文章生を経た様子もなく「達スル者」とは言い難い。宴での詩も無い。また忠平にも詩がない。

六人は、門下生中の優秀の者であるからというわけでもなく、自分から希望して参加させてもらったのでもなく、時平のよびかけ（左大臣のよびかけは命令に近いであろう）によることを確認しておかねばならない。

於戲、年ハ不ニ我ガ与ニテ。雖惜ニ鳳徳之及ニテ秋ニ、道ハ在ニ人弘ニ。猶悦ニ龍蹲之遭遇ニ。乃記シ大槪ヲ貽ニ於将来ニ、欲スル令ニ後代王公之倫ニ以テ知ニ今日ノ師資之礼ニ也ト云爾。

年月は人間の仲間ではないから、無情に流れ去り、鴻儒が年老いるのは残念だが、道は人が弘めるものであり、その道を弘めるべき弟子として

時平をもつ幸運に、善行は恵まれた。詩序は、善行の幸を述べて結ばれる。

右の通り、詩序によれば、六人の弟子の参加は時平の勧誘による。六人と時平の関係を確めよう。

平惟範 略歴は「公卿補任」につくのが最も便利である。それによれば、母は藤原長良女である（尊卑分脈同じ）。時平の父基経の実父は長良である（文徳実録他）。従つて、惟範と時平は元来は従兄弟である。更に、惟範の息男伊望・時望の母は人康親王女である（公卿補任）。時平の母も人康親王女である（公卿補任他）。当時の婚姻形態からして、惟範が親王女の許に通い、時平が親王女の許に幼時を過したとすれば、たとえ二人の女が同邸に住んでいたのではないとしても、惟範と時平の知り合う機会はずくかつ多かったであろう。同様に、伊望と時平もまた幼くして交遊が始まったであろう（時平が十一年の年長である）。

惟範と時平との交遊の早い時期のことは明らかではなく、仁和四<sup>(88)</sup>年十月に、藤原直方・源興基の二人を加えて四人で、弘仁以後の鴻儒で堪詩の者を択びその肖像画を巨勢金岡に画かせた（紀略）のがはつきり判る始めである（時平十八歳、惟範三十四歳。後には「延喜式」の編纂にも参預している）。

注意すべきは基経との関係である。惟範の兄正範は基経の五十賀を設け、賀宴のための屏風詩五首を道真に依頼している（菅家文章卷二・174）。惟範と時平だけでなく、前述の姻戚関係の故に、家と家とが近い関係にあったのである。

平伊望 惟範の二男。前述の通り、時平とは従兄弟である。延喜元年にはちょうど二十歳で、官は尾張権守、位は従五位下だから（公卿補任）、かなりの優遇である。「公卿補任」尻付で見る限り文章生を経た様子は

ない。宴での詩もなく、特に抜きん出た学問詩才があったわけではなく、宴への参加は、父惟範・従兄時平の縁によるのであろう。善行との関係も、時平・惟範に同席して講書を聴いたという程度であろう。

藤原興範 式家、藏下鷹一繩主一貞本一正世一興範(母山背氏)という系譜にある(尊卑分脈)。「公卿補任」によれば、貞観十五(873)年文章生(字常生)、以後は式部少丞、大丞、右中弁、式部大輔などを経て延喜十一(911)年参議、同十七年、七十四歳で卒す。延喜元年は五十六歳である。

時平・善行との関係ははっきりしない。善行は貞観十八(876)年十月から翌年七月にかけて蔵人所で御書を校定し、かねて天皇近侍の年少の者及び好書の士に「顔氏家訓」を講じている(三代実録)。貞観十五年に文章生となった興範は、あるいは十八年の講書に列したかもしれない。後年の、時平を筆頭とする「延喜格」編纂者十四人の中の一人である。

なお、「都氏文集」巻五によれば、擬文章生試に「荷鋤成雲」の詩を賦し、良香はこれを落第と評定している(十五人のうち丁第が七人いた、後出の高階茂範は丁第であった)。

三統理平 まとまった伝はないが、『大日本史料』第一編之五の延長四年四月四日条、『本朝文粹註釈下』(柿村重松)の作者列伝(二二三頁)に關係資料が集められている。文事を拾えば、寛平三(891)年方略の宣旨を蒙る(類聚符宣抄九)。同七年正月渤海客存問使となり(紀略)、八年少外記に遷る。元少内記であった(外記補任)。この時の大外記が大蔵善行で、少外記遷任は「三代実録」編纂のためであろう。<sup>(7)</sup>昌泰元(898)年大外記に転ず。善行もなお大外記にあり。同二年六月対策の改判を請う状を奏し、その愁状は六月十七日に問頭博士であった藤原春海に召し渡されている(類聚符宣抄九)。

寛平五年頃(8)から始まった「三代実録」編纂に従っていた理平は、編纂作業が完了に近づいた昌泰四(901)年正月、従五位下に叙せられ、二月越前介に遷った。この時、国史編纂からも離れたらしく、同年八月二日付の「三代実録」序文には、撰進者として名を連ねていない。越前介ではあるが、賀宴に参加したりしているので、京に在ることが多かったであろう。越前介は正六位下相当官で、従五位下に叙せられたばかりの理平が任じられたのは、国史編纂中ということも考えれば、やや不審に思う。どんな事情があったのだろうか。

延喜以降は、四年二月一日には大内記に在任しており(西宮記二—264)、<sup>(9)</sup>八月二十一日から始まった日本紀講書には召されて預席しており(春日本紀卷一引新国史、六年閏十二月十七日の竟宴では歌序と和歌とを作っている(日本紀竟宴和歌)。八年七月十四日菅原淳茂の策試の問者に定められている(類聚符宣抄九)。十一年重陽宴に詩を賦す(紀略・類聚句題抄)<sup>(10)</sup>。十四年重陽宴に詩の講師となる(貞信公記)。十六年重陽宴に詩を賦す(紀略・類聚句題抄)。十七年三月常寧殿に看花宴あり、大内記理平召されて序を作る(河海抄所引御記)。十八年重陽宴に詩を賦す(紀略・類聚句題抄)。二十一年三月二十八日省試の判のことで召されている(北山抄四)。

問頭博士であったかと思われる。卒年は延長四年四月四日、七十四歳である(勅撰作者部類)。

「二中歴」儒職歴によれば、式部大輔、文章博士に任ぜられたらしいが、他に傍証すべき資料を見出しえていない。「江談抄」には、詩の巧みなるを伝える説話があり、統理平集があったという(群書類従 P 585・609)。「和漢朗詠集」(巻上、月)に一句採られる。

理平は、道真・長谷雄なきあとの延喜詩壇の中では重要な役割を果たしていると考えるので、本稿の論旨とはやや外れて文事を書き列ねたが、

時平・善行との関係でいえば、「三代実録」「延喜格」「延喜式」の編纂に参預した博学であり、善行の片腕といってよい存在である。時平との接触も頻繁であったと推察される。

**藤原忠平** 関白太政大臣にまで昇ったこの人物のことはここに改めて経歴をたどる必要もないであろう。延喜元年の賀宴の時は、二十二歳、前参議（昌泰三年参議に任ぜられたが、すぐに叔父清経に譲った。宇多上皇の請による）右大弁侍従である。作詩の才などは伝えられていない。この賀宴にも詩は無い。「二中歴」撰関侍読には「貞信公大蔵善行学士橋仲遠蔵人」とあるので、忠平が善行の教えを受けたことはあるらしいが、その時期が延喜元年以前であるかどうかは判然としない。ただ、善行は基経の侍読である（二中歴）ので、年少の頃から父や兄と共に善行の講書を聴くことがあったと考えられ、延喜元年には既に「趨庭之生」と言いうる状態であつただろう。善行との関係はそれとしても、宴への参加、行酒の役は、やはり時平の弟であることを第一の理由とすべきであろう。

**紀長谷雄** 詩序に発昭とあるのは長谷雄のことである。発超（江談抄三）・発詔（紀家集）とも書く。長谷雄の伝については、後藤昭雄氏の「紀長谷雄・延喜以後詩序私注」（静岡大学教育学部紀要第25・26号）が詳しい。「延喜以後詩序」に見える「先師大夫」が、これまで言われていた大蔵善行ではないことが氏の論文に明らかにされている。

長谷雄は道真門に党した者であり、道真の詩友であるが、時平との関係も決して悪くはない。寛平三年、時平は天台山の最円和尚に法華経を授けられたが、聴に預ったのは、三善清行と紀有世と長谷雄の三人のみであつたという（紀家集、法華会記「平安鎌倉未刊詩集」）。道真左降事件においても、結果的には時平側として役割を果たしている。文学レベルでは道真と互に詩人として許し合う仲であるが、日常レベルでは、だからと

いって道真にことさらに味方して時平と対立するということはない、むしろ近い関係にあつた。

以上の六人は、興範は判然としないが、他は時平とかなり親密な間柄であることを知りうる。むしろ、善行との関係より、時平との関係の方が強いと察せられる。早く、山本信吉氏は「三代実録、延喜格式の編纂と大蔵善行」（歴史教育昭和41年6月）で、「彼（善行）引用者注」の文人として貴族層との信交を示す史料は『雑言奉和』しかないがそこにみる人間関係は時平を媒介とする面が強く」と言っているのは正しい見方であると思う。これまで、善行七旬賀宴を考える時、善行を中心に人間関係を見がちであつたように思われる。山本氏の指摘は改めて留意されるべきものであろう。

後藤氏は、六人が「善行学閥」の門下生ではないことの理由の一つに、彼等の詩に党派意識が無いことを指摘している。当時は争争が激しく、同門には仲間意識が強いのだが、賀宴詩にはそれが無いという。これは、私塾や大学の基盤にした「学閥」ではないということの他に、また六人が自ら善行の門下を称して集まった集団ではなく、時平の勧誘に従って集まった者たちであるせいであろう。たとえ一時的に受講しただけの関係にもせよ、意志して善行を「吾師」と拝するのあれば、やはり六人にも仲間意識は存在したはずである。ところが、善行の弟子として陪席してはいるものの、実は時平の勧誘で七盃之酒を勧める役となつた者達なので、彼等の意識は時平に向い、善行を祝う詩も、時平の美譽にふれることを忘れない。

一、二の例を挙げれば、紀長谷雄の詩。

吾師初滿七旬秋 吾が師初めて満つ七旬の秋

満腹昭昭是九流 満腹昭々たり是れ九流

司馬晚年修史了 司馬は晩年修史了り

尚平残暮念家休 尚平は残暮家休を念う

松寒未有霜枝変 松寒くして未だ霜枝の変有らず

鶴老終無雪鬢愁 鶴老いて終に雪鬢の愁無し

丞相顧思惇誨徳 丞相顧み思へり惇誨の徳

一朝恩祝百齡酬 一朝恩祝して百齡に酬ゆ

「満腹」は「莊子」の「偃鼠飲河不過満腹」による。「九流」は「文選」天監三年策秀才文三首（任彦昇）の「九流七略」の李善注に「漢書

日、九流有儒家流道家流陰陽家流法家流名家流墨家流縱橫家流雜家流農家流」とあって、この句、善行の兼学博識をいう。

「司馬」云々は司馬遷の史記編修のこと。「尚平」は後漢の尚長、字子平。「芸文類聚」隱逸に名が見える。王莽に仕えることを固辞して隱棲した。この句、善行の国史編纂と致仕表（後述する）とのことをなぞらえる。

「松寒」は周知の「論語」の歳寒のこと、貞節正しきをいう。「鶴老」は「文選」雪賦（謝惠連）の「皓鶴奪鮮」の李善注に「相鶴經云、鶴千六百年、形定而色白、復二千年、大毛落、茸毛生、色雪白」とある如く、鶴は老いても人間のようにには雪のような白髪を愁う必要は無いの意。松寒に善行の貞節を、鶴老に長寿を喩える。

「惇誨」は勉め教えること。「文選」西都賦の「命夫惇誨故老」とある語（後藤論文参照）。左大臣は、昔の善行の惇誨の徳行を思い、今、上寿百歳に酬ゆべく賀宴を設けて恩み祝うのであると、時平の恩（メグム、ネムゴロナリ、ウツクシム―名義抄）を言う。

この長谷雄の詩は、どちらかといえば、時平の恩を言うことにまだ穏やかである。平惟範の詩。

莫歎浮雲富貴遲 歎く莫れ浮雲の富貴遲しと

可憐東閣有心期 憐むべし東閣に心期有るを

義兼師父恩偏至 義は師父を兼ね恩は偏へに至る

善誘難忘函丈時 善誘は忘れ難し函丈の時

「浮雲富貴」は「論語」述而の「不義而富且貴、於我如浮雲」による。

「東閣」は「蒙求」標題に「漢相東閣」とあるそれで、公孫弘が丞相となると、客館を建て東門を開いて賢士を招いた故事による。「師父」は詩序に「一日為師、終身為父」とあるに同じ意。「善誘」は「論語」子罕の「夫子循循然善誘人」により、「函丈」は師と自分の席の間に一丈の間隔を置く意で、「礼記」曲礼による語（後藤論文参照）。

右の惟範の詩は、善行の学才などには触れず、時平の恩を言うことを主とする。長谷雄の詩といい惟範の詩といい、濃淡はあっても、この宴の主催者である時平の美拳を通して、善行を称えるという趣なのである。

六人の立場は、時平と共に勸酒を行っているとはいえ、祝の主催者ではない。あくまでも時平に陪っているのである。「雜言奉和」の詩題は、時平に関しては「秋日於城南水石亭祝藏大師七句」とあるが、長谷雄等六人及び列席の十二人については「七言。秋日陪左丞相城南水石（之）亭祝藏外史大夫七句之秋。応教」とある。時平以外は、時平が「藏大師」を祝うのに陪して、その教命に応じて詩を上っているのである。詩の作者名の記し方も、時平はただ「門生」という肩書のみだが、長谷雄らは「左大弁」とか「大藏卿」とかの官名を付している。つまり、善行の弟子ということで勸酒の役にはなったが、時平と同資格で祝っているのではない。時平に陪従しているのである。そこで、彼等の詩は、前に見た如き屈折した祝い方になるのである。

## 三

前章に扱った六人はともかくも趣庭の生であることははっきりしているが、この章で考察する十数名の列席者については、一時的な受講者という程度においてさえも弟子であつたかどうかは明かでない。詩序、各人の賀詩においても全く言及されていない。

そもそも、時平を加えた七人の門弟子と他の者とは明確に区別されている。まずそのことを明らかにしておこう。

賀宴詩を見ると、善行に対する呼称において七人と他の者とは違がある。時平は自分を「門生」と言い、善行を「大師」という。長谷雄・興範は「吾師」と呼び、惟範は詩中に呼称を用いないが、詩の自注で「惟範等受業於蔵家助感相府今日之会故云」と「蔵家」という。蔵家は三人称的表現であるが、注の文脈では「吾師」の如き呼称は使えない。蔵家はやむをえぬ語である。理平の詩には呼称がなく忠平・伊望には詩そのものがない。

一方、他の者はどうかといえば、「大夫」とする者に高階茂範・藤原菅根・小野美材・物部安興・紀淑光・笠夏蔭の六人、「外史」（大外記の唐名）とする者に惟良高尚、「蔵史」とする者に藤原春海、「蔵家」とする者に平有相、「君」とする者に橘澄清・小野美材（二様あり）である。大蔵是明は「家父」とするが、これは善行の息男の故である。「君」という二人称的表現が二人いるが、他は「大夫」「外史」「蔵史」「蔵家」という三人称的表現をしている。彼等が善行を「師」と称することはない。

小野美材の詩に「座客皆為門弟子」の句があつて、あたかも美材をも含めて全員が門弟子であるかに見えるが、「皆」とは時平等七人のみを

指すのであって、美材ら列席者は「座客」の数には入らない。そのことは、菅根の詩に「弟子七人年七十」とあり、理平の詩に「七人群祝七旬齡」「一院群居人七个、疑從天上斗星投」とあつて、祝っているのは七人で、この院に居るのも七人であるという。美材の「座客皆為門弟子」も七人のみを言うと言解さねばならない。なお、詩序に、時平が宴のことを言い出したとき「総有六人」とあつたが、それも右と同様の見方なのであろう。

そこで、この賀宴の人的構成を図式的に示せば、祝われる人として大蔵善行、祝う人として時平、時平の勧誘に応じて行酒の役を勤めた弟子六人、以上の八人が宴の当事者であり、他の十三人は参観者（第二義的参加者）ということになる。この「座」の外側に十三人は在る。宴はそれらをも包んで在るのだが、彼等は原則的には直接に善行を祝う立場ではない。

この立場は、例えば、「菅家文章」巻一（78）の「暮春、南亜相山荘の尚齒会を見る」における「見る」と似た立場であらう。因みに、「栗田左府尚齒会詩」は、皆「見る」詩で、七叟の詩ではない。

以上、十三人が宴の場では門弟子の資格ではないことが明かとなった。勿論のこと、中には実際に門弟子である者もいるであらうし、何かの折に受講したという程度であれば、あるいは全員がそうであるかもしれない。宴の趣旨からすれば、それも可能性の有ることであらう。しかし、あくまでも、宴での立場は門弟子ではない。

そこで次に、一人一人の参加理由を検討しなければならないのだが、資料が乏しくて、時平や善行との交渉を確かめることが困難である。乏しい中で、かすかながらも時平、善行との交渉を知りうるのは、三善清行、藤原菅根、高階茂範、小野美材ら数人にすぎない。他には、善行の

男である是明、長谷雄の男である淑光の二人は、父に随つての参加であると考えてよいであろう。

現在判明する交渉は右の如くであるとしても、時平主催の宴に誰でもが自由に参列できるはずもないので、必ずや宴に陪すべき理由はあったはずである。

その理由のひとかた推量されるのが、国史編修のことである。賀宴が「三代実録」完成慰労を兼ねていたとする山本信吉・後藤昭雄氏の見方は、撰進の月日（八月五日）と宴の日の近接からも肯定してよいと思うが、長谷雄の詩に

司馬晚年修史了 尚平残暮念家休

工 藤 重 矩

とあるのは、司馬遷「史記」を言うので、長谷雄は「三代実録」の撰進を意識しているのである。ただし、詩序にもそのことは言及されないし、人々の詩にも他には触れられていないので、あくまでも七句算を賀す宴であつて、編纂慰労のことは表面には出ていない。というより、編纂慰労の具体的な形が七句賀宴といつてよいであろう。

宴が慰労を兼ねたとすれば、当然に、列席者の中にその関係者が加わっているのではないかと推測する。「三代実録」序文によれば、編者には、時平、善行、理平の他に、源能有と菅原道真がいた。能有は寛平九年薨じ（右大臣正三位）、道真は延喜元年正月左遷され、理平は延喜元年二月に越前介に遷つて、結局最後に編者として名を連ねたのは時平と善行の二人であつた。賀宴にはその二人と理平も参加している。

問題はその他の者たちである。編纂には右の者以外に、資料の収集整理にあたる多くの所員がいたはずである。例えば、後年の「新国史」の撰国史所勤務者の場合、その身分は「史生」「少監物」「越前権少掾」「備前権介」「紀伝学生」などである（坂本太郎『六国史』）。これらの撰

国史所勤務者の他にも、外記、内記を始め関係所司は常に連絡協力したであろうから、編纂の過程で時平や善行に接触する機会も多かったであろう。

そのような視点で列席者の編纂時（寛平四、五年〔延喜元年〕）の身分を見ると、藤原菅根は寛平三年少内記、同六年大内記、同九年式部少輔、昌泰二年文章博士。三善清行は寛平九年備中介を終えて帰京、昌泰三年二月刑部大輔、五月文章博士。惟良高尚は寛平元年民部大輔在任。藤原春海は寛平元年少内記在任、延喜元年前下野守。小野美材は寛平六年少内記、九年大内記。橘澄清は寛平二年文章生、九年藏人兵部少丞。紀淑光は昌泰元年文章生。大江千古は延喜元年方略策だから昌泰寛平年中は文章生であろう。その他、能登権介物部安興、学生笠夏蔭、刑部大輔平有相などの寛平昌泰中の官は不明だが、文官であることはまず疑いないし、列席者たちに学問の備わっていたであろうことも官歴からして明らかである。

これらの官と「新国史」の場合とを併せ考えると、文章生、学生、内記などは撰国史所に入入していた可能性はあらうと思う。

右のことは所詮は可能性にすぎないのだが、なおそう考える理由の一つは、延喜四年日本紀講書が始まったとき、賀宴列席者のうちの数人が召人として預席しているからである。「釈日本紀」巻一には、

新国史曰、延喜四年八月廿一日壬子。是日、於<sub>三</sub>宜陽殿東廂、令<sub>三</sub>初講<sub>三</sub>日本紀<sub>一</sub>也。前下野守藤原朝臣春海為<sub>三</sub>博士<sub>二</sub>。（中略）特

召<sub>三</sub>大舍人頭惟良宿祢高尚・文章博士三喜朝臣清行・式部大輔藤原朝臣菅根・大内記三統宿祢理平・式部少丞大江千古・民部少丞藤原佐高・少内記藤原博文等<sub>二</sub>令<sub>レ</sub>預<sub>三</sub>講座<sub>一</sub>焉。

とあつて、講博士春海を始め、召人七人のうち五人が宴の出席者であ



る。何を基準に召人の人選が行われるか、必ずしも明白ではないが、「日本紀」に造詣ある者と推量される。日本紀講書は「日本紀学」の師承という性格があつて、講博士は前回講書の尚復の中から選ばれるのを例とする。春海は元慶度の尚復である（西宮記二一七）。おそらくは召人も「日本紀学」という観点から選ばれたであらう。そして、またこれも詳細は別稿に譲らねばならないが、日本紀講書は、国史編纂とも密接な関係にあると考える。

もしそうであれば、講書の召人たちは国史に造詣あるを以て「三代実録」編纂にも何らかの役割を果たしたのではないかと推測するのである。

以上、列席者の参加理由を考えてみたが、これという判然とした結果は得ることができなかった。国史編纂を媒介とする関係は、考えうる一つであるが、なお確たるものとは言ひ難い。今後に俟つべき問題である。

## 四

善行七十賀宴の出席者が、上に検討したように、善行よりは時平と繋りの強い人々であるとすれば、賀宴の性格をどのように理解すべきであるかが、次の問題であるが、その前に、大蔵善行その人の延喜元年における立場を、賀宴の詩に依つて見よう。

後藤氏は、この宴が善行学閥の勝利の宴とはみなしえない理由の一つに、善行の詩に弱々しい不遇の嘆きが窺えることを挙げている。

二首のうちの二、

草木在秋縮地毛

草木は秋に在りて地毛を縮ませ

人逢急景慶孤包

人は急景に逢ひて孤包を慶ぶ

学成道藝才貧素

学びて芸道に成るも才は貧素

瑩拂声名価富豪

瑩ひらきて声名を拂はらへば価は富豪

壽縱七旬寧作短

壽いのちは縱ひ七旬なれど寧ぞ短しと作さん

官纔五品尚為高

官は纔かに五品なれど尚ほ高しと為す

空遣客難儔仙菓

空しく客難を遣して仙菓を儔む

可向東方曼倩嘲

東方曼倩に向ひて嘲るべし

発句の「孤包」は用例を見出しえない。結句は、東方朔が人に卑位を問われて「答客難」（文選四五に収まる）を表わし、長寿を願つて仙果を儔み天に昇つたという故事を踏まえて、表面は、そのような東方朔の行為を嘲ることができるといふが、後藤氏の指摘するとおり、五品もなお低いと考え、七旬も短いというのが本心であらう。「学びて道芸に成るも」云々でも、才は貧素と謙退の辞を用い、「瑩きて声名を拂はば富豪に価す」と、貧に居ても学において声名を詰めれば、富豪と同じであると言ふのも、何やら強がりに聞え、我が「道芸」と「声名」とをことさらに強調しているようでもある。

いま一首の詩は、

秋気客意両蕭條

秋気と客意と両に蕭條たり

有限光陰過半消

有限の光陰は過ぎて半ば消ゆ

騎竹遊童如昨日

騎竹の遊童たりしは昨日の如く

懸車退老忽今朝

懸車の退老なるは忽ち今朝なり

扶身藜杖隨三徑

身を扶くる藜の杖は三徑に随い

慕徳台星仰九霄

徳を慕う台星は九霄に仰ぐ

縦假数年棲旧谷

縦たと假数年旧谷に棲むとも

每春応聴鳥遷喬

春ごとに応に鳥の喬きに遷るを聴くべし

秋のけはいも人の気持も共に蕭條としており、限り有る年月は速かに過ぎ去つて半ばは消えた。竹馬に乗つて遊んだ子供の頃はまるで昨日の

ようなのに、車を懸けて致仕する七十の老年はもう今朝のことだ。これからは老身に藜の杖をついて我が家の徑を逍遙し、夜ともなれば徳を表わす三台星を遙かな天に仰ぎ見る。たとえ、もし、數年の命あつて故里に隱棲したとしても、春ごとに友を呼ぶ鳥の声を（大臣の召きを）聴くことができるにちがいない。

「懸車」は致仕のこと。致仕表には常用される語である。「退老」も隱退して老を故郷に送る意である。「文選」運命論（李肅遠）に「退老於家」とあり、李善注は「礼記」檀弓上「曾子謂、子夏曰、吾與汝事夫子於洙泗之間、退而老於西河之上」を引く。「白氏文集」卷六十池上篇序にも履道の家を「白氏叟樂天退老之地」という。「隨三徑」もまた、「蒙求」の「蔣詡三逕」や陶淵明歸去來辭（文選四五）の「三徑就荒、松菊猶存」の如く、隱退の生活をいう。「台星」は三台星、三公に比す。ここは時平を比喻する。「遷喬」は「詩經」小雅 伐木「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、遷于喬木、嘯其鳴矣、求其友生、相彼鳥矣、猶求友聲、矧伊人矣、不求友生、神之聽之、終和且平」による。この詩を毛伝は「伐木燕朋友故旧也。自天子至庶人、未有不須友以成、親親以睦、友賢不棄、不遺故旧、則民德歸厚矣」と注す。「本朝文粹」卷十暮春於右大丞亭同賦逢花傾一盃詩序（大江匡衡）に「右大丞者朝之重臣也。（中略）志存兼濟、而旁振賓、如遷喬之呼友」とあって、右大弁が広く士を招くことを言うのに遷喬を典拠としている。毛伝を踏まえたものである。これを以て善行の「毎春応聴遷喬」を解すれば、時平の故旧を召く声を春ごとに聞くであろうの意で、時平に故旧を遺れざるを訴えているのである。

右の二首の詩を覆う、不遇の嘆き、致仕隱退の氣配、そして「詩經」に託しての恩顧の願い、これらは確かに勝利の宴にはそぐわないし、賀

宴の語から受ける印象とも異なる。この善行の氣弱さは何に起因するのであろうか。

延喜元年、善行が直面していた問題の一つは致仕であると推量される。そもそも七十歳は、「礼記」曲礼に「大夫七十而致事」とあるごとく、必ず致仕の表を上る。善行も慣例に従って正月には上表したであろう。しかしそれは許されなかった。

時平の詩。

鶴齡松操又華顛 鶴の齡松の操また花の顛

保得天年即地仙 天年を保ち得て即ち地仙

只合明王能養老 只明王の能く老を養ふに合う

當時不許賦帰田 當時許さず帰田を賦すを

先是大師賦詩 是より先大師詩を賦すに帰

有帰田趣故云 田の趣有り、故に云ふ。

「養老」は「礼記」王制の「凡養老、有虞氏以燕礼」云々、また「有虞氏養国老於上庠」云々の條による語。醍醐天皇の仁徳の世に生きあわせえたことをいうのであろう。當時許さずとは、天皇が致仕の表を納めなかったことをいうと思われる。時平が許さなかったというのはないであろう。致仕を許すかどうかは天皇の決定によるし、第三句の「明王」云々からも、天皇のことである。「帰田」は致仕して田園の居に帰るをいう。「文選」卷五に帰田賦（張平与）があり、「白氏文集」卷五五にも想帰田園の律詩がある。

致仕表は上表返表を兩三度繰返すのが慣例である。第一表は正月として、第二第三表の時期は一定しないが、もし、第一表の返表の理由に国史未完了のことがあったとすれば、その撰進の終った八月が再上表の機会である。とすれば、九月この賀宴の頃、上表、返表のやりとりがなさ

れていたかもしれない。

致仕のことは時平の詩だけではなく、他の人々の詩にも言及されている。

小野美材の詩。

大夫欲繼二疎蹤

大夫繼がんとす二疎の蹤

珍重類齡有壯容

珍重す類齡にして壯容有るを

座客皆為門弟子

座客は皆門弟子たり

祝君長比歲寒松

君を祝いて長く比す歲寒の松

「二疎」は「蒙求」に「二疎散金」とある、漢の疏廣、疏受のこと。

「白氏六帖事類集」卷十七致仕に「二疎 漢疏廣為太子太傅、受為少傅、廣謂受曰、知足不辱、即日移病、滿三月告老、賜黃金二十斤、太子賜五十斤」とある。移病は病の由の移文を提出すること。

告老は致仕すること。「白氏文集」卷二不致仕の詩にも「賢哉漢二疎、彼独は何人」とあり、致仕して身を全うした賢者というイメージを

「二疎」(二疎、二疎とも)は持つ。それ故、致仕表には、「二疎知止」(梁沈約、致仕表、芸文類聚十八老)の如くによく用いられる語である。

このような二疎の蹤を善行も継ぐうとして、美材は言う。實際

に善行の上表という行為の裏付がなければ言い得ないことである。

同じく二疎の故事を踏まえた句を、三善清行も作っている。

鳴桐半燼遇知音

鳴桐は半ば燼りて知音に遇ふ

七十還悲雪鬢侵

七十還りて悲しむ雪鬢侵すを

計老自栽松百丈

老を計れば自から栽えし松は百丈

校高平對嶺千尋

高きを校れば平く對ぶ嶺は千尋

紫芝未變南山想

紫芝未だ變せず南山の想

丹露猶凝北闕心

丹露猶凝る北闕の心

暮齒豈忘疎傳志

暮齒豈に疎傳の志を忘れんや

應縻相府篤恩深

應に縻がるべし相府の篤恩深きに

蔡邕は桐の火に爆ぜる音を聞いて良桐を知ったが、良桐たる善行は人生も燃え尽きようとする晩年、知音時平に出会うことができた。しかし、

齡は七十、祝うべき長寿も鬢の白きを思うとかえって悲しいことだ。善行の長寿は百丈の松にも等しく、学の高きは人々の仰ぐ千尋の嶺に對ぶほどだ。四皓のごとくに南山に隠棲することを想いつつも、やはり朝廷に仕える赤心はもとのままである。七十の晩齡、どうして致仕の志を忘れよう。しかし、その志を果せないのは、左大臣の篤い恩の深きに縻がれてのことだ。(官への未練ではなく、それほどに左大臣の恩は深いのだ。)

清行の「暮齒、豈に疎傳の志を忘れんや」というのも、上表の事実がなければ、いかにも致仕を強要していると聞える言い方である。疏廣の言にある「足るを知れば辱しめられず、止るを知れば殆ふからず」(漢書)の一文は、実は他ならぬ三善清行が「奉萱右相府書」(本朝文粹)で道真に大臣辭任を勧めて、

伏冀、知<sub>三</sub>其止足<sub>一</sub>、察<sub>三</sub>其榮分<sub>一</sub>、擅<sub>三</sub>風情於煙霞<sub>一</sub>、藏<sub>三</sub>山知於丘壑<sub>一</sub>、後生仰視不<sub>三</sub>亦美<sub>一</sub>。

という、その「知其止足」に響きあう。道真は止足の分を知らずに左降されたが、善行は足るを知り止まるを知って、二疎の志を忘れてはいないのだが――と。二疎をひきあいにし出す時、清行の胸中には道真の姿があったはずである。更には、「校高」云々の句は「論語」子罕「顔淵喟然歎曰、仰之弥高、鑽之弥堅、瞻之在前、忽焉在後、夫子循循然善誘人」を踏まえているであろう。そしてこの「之を仰げば弥々高し」は、「奉萱右相府書」にも、「後生の仰ぎ視るもまた美ならず」に踏えら

れている。ちょうど、道真の裏返しの形で善行を称えているのである。清行の中に、正月の左降事件の余波が揺曳しているのを知るのであり、他の人々も、清行の奉書の内容を熟知していたであろうから、「二疎」

「疎傳」と聞けば、道真の姿を思い浮べたことであろう。

さて、やや横道にそれたが、今一首致仕に関する詩を見ておこう。高階茂範の詩である。前半は省略して、律詩の後半、

鶴飛雲舞誰堪伴

鶴飛んで雲に舞へば誰か伴するに堪へん

亀曳泥行未足論

亀曳きて泥に行くは未だ論ずるに足らず

何用君為朝旧老

何ぞ用いん君の朝の旧老と為る(？)

載来丞相祝年恩

載<sup>すなは</sup>ち来る丞相年を祝ふの恩

「亀曳泥行」は「莊子」秋水篇による。楚王が莊子を召そうとした時、龜にたとえて、死んで貴となるよりは泥の中に長生きした方がよいと言って仕官を断つた話を踏まえて、茂範は逆に、莊子の生き方は未だ論ずるに足らずと否定し去る。

七十賀に、今後も活躍されよと言うのはもっともなことであるが、致仕表が上表されている最中であつてみれば、そして、時平・美材・清行らの言葉を重ねてみれば、単なる社交辞令とのみは言えないと思う。

善行の致仕の最終的結論は——致仕が許されるかどうかは——第三表が返表されるかどうかで決るが、賀宴の段階では、善行の詩の隠棲を願う句などからして、まだのようである。そのような不安定な時期に賀宴は設けられたのである。但し、不安定とは言つても、そして最終的には天皇が決定するのだとしても、左大臣時平が実際上は決定するのである。うから、時平に致仕を認める意志がなければ、致仕不許は決つたも同然である。その時平には致仕を認めるつもりは全く無かつたことは、後に善行を「延喜格式」の編纂にあたらせていることから窺いうるが、列

席者の詩が頻りに時平の恩を強調し、また清行の詩の如くに、時平の恩に縋られて二疎の志を果しえないであろうと言うところからもそれは察しうる。

## 五

大外記従五位上にすぎない善行のために左大臣時平が七旬算の賀宴を設け師資の礼を行ったことは、世間の人、とりわけ文人たちには大きな驚きであつたと思われる。列席者の詩は、時平の拳を通して善行の幸を言う型が多い。中でも、時平の恩を直接に言う者は、時平、善行を除く十七人のうち八人に及ぶ。長谷雄、惟範、清行、茂範の例は既に見た通りである。他には澄清「丞相恩深洗水泉」、安興「誰道恩波倍一身」、千古「上閣恩情豈不伝」、淑光「暮齒無廻恩有殊」の如くである。まさに詩序に「恩の至なり、道の榮なり」と言うとおりである。

しかし、時平の恩に浴する善行を讃嘆する声の陰で、しだいに、善行の周辺には不穏な空氣が立ち始めていたようである。

惟良高尚の詩には善行の危うい立場が窺われる。

水石多年物不侵

水石多年物侵さず

宛然外史我前森

宛然として外史我が前に森たり

山松磊砢慙先達

山松は磊<sup>も</sup>砢<sup>も</sup>として先達に慙づ

隣角奇靈謝折音

隣角は奇靈にして折音を謝す

幕裏賓朋應讓座

幕裏の賓朋<sup>い</sup>に座を讓るべく

階庭蠅矢莫銷金

階庭の蠅矢金を銷<sup>ゆ</sup>つこと莫れ

素王數齒期頗在

素王<sup>よ</sup>齒を數ふれば期は頗る在り

祝着前途豈用心

前途<sup>い</sup>を祝<sup>い</sup>う豈に心を用いんや

「山松」は、晋の袁宏の詩に「森森千丈松、磊砢非一節」、雖<sup>レ</sup>無<sup>二</sup>

檳榔麗<sup>ビナング</sup>、較為<sup>カウ</sup>梁棟桀<sup>リョウトウセツ</sup>」(芸文類聚、松)、あるいは「世説新語」賞譽の「庾子嵩目<sup>コトノミ</sup>和嶠<sup>ワカク</sup>、森森如千丈松、雖磊何有節目<sup>レイカニハナハナ</sup>、施之大廈<sup>セシノオホヤ</sup>、有棟梁之用<sup>ユウリョウノヨウ</sup>」による。磊何はゴツゴツとしている様。「慙先達<sup>ソノサキノミチ</sup>」は「文選」卷三十一雜體詩三十首のうち、盧諶が劉琨の交誼に感謝して作った詩の「常慕<sup>トモニシ</sup>先達<sup>サキノミチ</sup>、觀<sup>ミ</sup>古論<sup>コロン</sup>得失<sup>トクシツ</sup>」(中略)徒慙<sup>トモニシ</sup>素絲質<sup>ソシシツ</sup>」を踏えているであろう。「文選」のその詩の初句は「大廈<sup>オホヤ</sup>須<sup>ス</sup>異材<sup>イサイ</sup>」で始まる。「世説新語」の「大廈<sup>オホヤ</sup>」に應じ、「異材<sup>イサイ</sup>」は千丈の松をさす。惟良高尚の能く善行の善誘に應じえないことを慙<sup>ソノミチ</sup>じるといふのであろう。

「鱗角<sup>リンカク</sup>」は、鱗が出現するような仁政の世に遭遇した幸をいう(鱗は芸文類聚、祥瑞)。「折音<sup>セツオン</sup>」は「文選」吳都賦の「岑鳥不折音<sup>センニシノセツオン</sup>」の李善注に「左伝曰、鳥則折<sup>セツ</sup>木、又曰鹿死不折<sup>セツ</sup>音、鹿得<sup>トク</sup>美草<sup>ミカウ</sup>呦呦而鳴、至<sup>ニ</sup>於困迫<sup>コンパク</sup>將死<sup>シ</sup>不暇<sup>セツ</sup>復折<sup>セツ</sup>出音<sup>シュツオン</sup>、急之至也」による。音を折んで鳴くことのできる幸を感謝するの意である。

問題にすべきは次の対句である。「蠅矢<sup>ショウサ</sup>」は「芸文類聚」卷九七蠅に「漢書曰、(中略)又曰、昌邑王賀、夢<sup>ト</sup>青蠅<sup>セイロウ</sup>之矢積<sup>シ</sup>西階東<sup>シ</sup>可<sup>カ</sup>五六石<sup>シ</sup>、以問<sup>ニ</sup>龔遂<sup>コントウ</sup>、曰、陛下左側、讒人衆多、願皆放<sup>ニ</sup>逐之<sup>ニ</sup>、賀不<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>其言<sup>ニ</sup>、卒至<sup>ニ</sup>於廢<sup>ニ</sup>」を典拠とする。蠅が讒言の人を比喻すること「詩經」小雅 青蠅「宮々青蠅、止干<sup>ニ</sup>樊<sup>ニ</sup>、愷悌君子、無信讒言」にある。

「銷金<sup>ショウキン</sup>」も讒謗のこと。「文選」卷三九詣建平王上書(江文通)に「下官聞、積毀銷金、積譏磨骨」にある。この銷金の語は、道真の「辞右大臣表」第三表の

吹毛之疵、逐<sup>ニ</sup>榮華<sup>ニ</sup>以鋒起、銷骨之毀、隨<sup>ニ</sup>爵祿<sup>ニ</sup>以荇臻。

とある、その「銷骨」に同じである。銷骨は「衆口鑠金、積毀銷骨」(文選三九獄中上書自明)によるが、義は銷金も同じである。

「蠅矢金を銷<sup>セ</sup>つこと莫<sup>レ</sup>れ」とは、道真の感じていたと同じ嫉視批難議

言が、程度の差はあれ、善行の周辺にも鋒のごとく起りつつあったことを物語る。「幕裏の賓朋」とは一般的には政府中枢の友人ということであるが、賀宴の詩である以上は、時平は別として、六人の門弟子を指すであろう。彼等に向って「座を譲るべし」と言う。善行の昇進榮達を願う言葉である。対するに「階庭の蠅矢」という。これも賀宴にあつては居並ぶ列席者たちを自ずと指すことになる。甚だしく刺激的な言辭である。逆に言えば、そう言わせるだけの状況が有ったと言えよう。或いは、将来のこととして「金を銷<sup>セ</sup>つこと莫<sup>レ</sup>れ」というとも解し得るのであるが、その場合でも、高尚は讒言が起ることを予想しているのである。高尚の強い表現や、次の千古の詩なども考え併せれば、既に嫉視批難は、明確な攻撃の形はとらずとも、起っていたと推量する。

高尚の詩は、善行の年は七十、上寿百歳までにはまだ年数はいささか有る、これからの前途を祝っているのだから、心を労すことなきようにと結ばれる。

さて、何故、惟良高尚は右のようなことを言ったのか。おそらく高尚は善行の弟子―それもごく近い―であろう。「山松磊何慙先達」の句はそれを言うのであろう。それ故に、善行を守るといふ気持でかの詩を作ったのであろう。結句の「豈用心」は労わり励ます言葉である。

次の大江千古の詩は、高尚のほどは顯著でないが、かすかに謗の起りつつある兆候は窺える。

幽閑水樹集文裁 幽閑なる水樹文裁を集へ

尚齒先尊直筆才 尚齒先づ尊ぶは直だ筆才

丞相優賢無外意 丞相賢を優として外意なし

七旬餘祝十旬杯 七旬にして餘<sup>あらかし</sup>め祝う十旬の杯

第一、二句はよくよめない。幽閑な水閣には文才たちが集まってい

る、尚齒においてまず尊ぶのは筆才である、の意だろうか。

第三句、左大臣は善行の賢なるを優として宴を設けているのであって、それ以外の意味はない。「外意」は叛心の意で用いることが多いようだが、ここは別意の意であろう。

このようにわざわざ、左大臣に外意無しというのは、何かこの宴に外意を感じる者が居たのであろう。千古の詩だけ見れば、ことさらに嫉視ありというほどではないが、高尚の詩を重ね、清行の詩を重ねてみれば、あながちな推量でもないであろう。

道真が左遷されて、共通の敵を失った学儒たちの間に、文人相軽のならいで、時平に重用される善行に、鋒先が向き始めるのも自然の勢である。善行にしてみれば、清行らが二疎の志を讚美すればするほど官に居づらくなるであろうし、時平の恩を強調すればするほど隠微な嫉妬の目を感じたのではあるまいか。

## 六

これまでの検討の結果——六人の弟子は時平の誘いに従って勸酒の役を勤めたこと、善行は致仕表を上表しており、時平の重用をねたむ空気が起りつつあったこと、これらが認めうるとして、賀宴の性格をどのように理解しうるかを、最後に考えてみよう。

善行が昔に時平に教授することがあったのは、時平自身がそう言うからには、疑いないことである。であれば、賀宴を設けて不思議とは言えない。だが、たしかに理由のあることはあっても、同時に驚くに足ることでもあった。

算賀は四十歳に始まる。だから、もし、弟子である故に善行を賀さねばならないとすれば、その役は当然に基経でなければならない（二中歴

に基経の侍読とある）。四十、五十と二度の機会にも賀を行った様子はない。六十（寛平三年）は基経の薨じた年である。そして七十歳となる。撰関がその侍読の算賀を設ける習慣はなかったのであろう。時平の設宴を異例とすべきである。だから人々は筆をそろえて時平の恩を強調するのであろう。

元来しなくてよいことを、ことさらにしたとなれば、そこには何か事情があるはずである。ここで留意すべきは、山本信吉氏の指摘である。即ち、この賀宴の参加者で後に延喜格式の編纂の中心となった者——時平・善行はもとより長谷雄・清行・惟範・理平・興範・菅根・忠平・澄清等——が多く、この日の宴は「延喜格式の編纂の前奏曲とでもいえる集り」でもあったという。たしかに、人物の重なり具合を見れば、格式の側からの見方ではあるが、宴の性格を考える上で、示唆的である。

延喜格式は、延喜五年<sup>(16)</sup>に編纂を開始するが、時平としては、それ以前から計画は有ったのであろう。格式の編纂というような事業には、善行の如き才能がぜひ必要であり、今後とも善行を中心に作業を進めたい。それについては、善行のリーダーシップを快からず思う者も「三代実録」を編むなかで出て来はじめている。そこで、時平自身が善行を師と仰ぎ、主だった儒者たちにも強いて師資の礼をとらせることで善行の立場を強め、仕事をし易くしてやろうとの配慮があったのであろうと、想像する。

時平が善行を「先生」と拝し、長谷雄や惟範らもまた「先生」といえば、他の儒者たちもむやみな批難はできないであろう。そのような効果をこの宴はもったであろう。仮に、時平の意図は私の想像通りでないとしても、結果的にはそうなったと考える。

時平は左大臣なのだから、そのような遠回しなことをせずとも、学者

はその命令に従ったであろうけれども、しかし、陰での善行に対する風当りはいよいよ激しくなるであろう。道真が、諸納言のサボタージュを受けた時、宇多法皇に諸納言への説得を依頼しているが（文章巻九・606・607）、おそらくはそうするたびに、道真への反感はいよいよ増大したはずである。

「大鏡」時平伝に次のような話がある。延喜の御代、世は甚だしく華美に流れ、これを正そうとしたがなかなかうまくいかない。そんなある日、時平はとびきり派手な装束で参内した。ところが、帝はこれを小薙から見咎めて、けしからぬ振舞として退出させてしまった。ために時平は恐懼して一箇月ほど門を出ずに謹慎した。このことがあって、世間の過差はすっかりやんだ。ところが、この事件、内々によく聞いてみれば、帝と時平とがしめしあわせての芝居だったということだ、と。

「大鏡」の話がどこまで事実に基づく疑問ではあるが、七十賀宴を前述のように考える時、時平の仕方に共通するものを見出すことができる。「やまとだましひなどはいみじくおはしたる」（大鏡）という時平の姿を、善行七十賀宴に、私は見る。

この章は多く想像を述べたが、その想像はともかくとして、この賀宴によって、道真左遷後の文人社会の混乱が治まったことはたしかであろうと思う。そしてそれは、時平・善行ラインの確立でもあった。これを以て、この賀宴の役割の第一とすべきであろう。

# 註

- 1 「雑言奉和」は「日本詩紀」の詩家書目に「後人且く首簡の四字を取りて書名と為す」とあるとおり、全体の内容には即さない。川口久雄『三訂平安朝日本漢文学史の研究上』の修訂詩家書目は「雑言奉和」「残菊詩巻」「水石亭詩巻」と三部に分っている。今は便宜上、七十賀宴詩の部分も「雑言奉

和」の名を用いる。

- 2 「文人相軽」（日本文学 一九七三年九月）「菅原道真の近院山水障子詩をめぐって」（同上 一九七七年七月）など。

- 3 賀宴詩作者が、実際に宴席に陪っていたかどうかの確証はないが、例えば、粟田左府尚歯会詩（群書類従）の場合には、あとで詩のみ遣った者はその旨題に明記されており、賀宴詩の場合には、題から見れば皆陪席しての詩であり、反証もないので、陪席の作として扱う。

- 4 本文は「学生笠夏蔭」とあるが、先人皆「笙」を衍字とするに従う。

- 5 因みに言う。七人といえば七叟を連想するのは容易である。更に七十の寿である。おそらくはそれ故に、詩人の何人かは尚歯会を想起している。大江千古が「尚歯」の語を用い、菅根は「世間栄耀更応無」という。この句は履道の尚歯会、白氏の「人間此会更応無」に依るであろう。菅根は七人を七叟に見立てているのである。ただし、時平の三十歳をはじめ、六人は皆七十にははるかに及ばない。全体としては尚歯会の意識はないであろう。

- 6 「菅家文章」は古典大系による。その作品番号を付した。

- 7 山本信吉「三代実録、延喜格式の編纂と大蔵善行」（歴史教育 14巻6号 昭和41年6月）

- 8 坂本太郎「六国史」（吉川弘文館）二九九頁。

- 9 「新訂増補故実叢書」による。「二一264」は第二分冊二六四頁。以下同じ。

- 10 「紀略」と「類聚句題抄」の題が一致することにより「紀略」の年の作と判断する。以下同じ。

- 11 後藤昭雄「紀長谷雄の山家秋歌について」（国語と国文学 昭和51年1月号）

- 12 拙稿「藤原菅根（上）―寛平延喜期の文人の周辺―」（福教大紀要27号 昭和53年2月）

- 13 「鳴桐」は「搜神記」の燧尾琴の故事によるか（芸文類聚四十四、琴にも）。

- 14 「南山想」は紫芝の語を伴うので、四皓の故事によるか。「文選」解嘲（揚雄）に「四皓榮を南山に采る」の句あり。

- 15 虎尾俊哉「延喜式」（吉川弘文館）六一頁。

- 16 注7山本論文参照。

付記 本稿を草するにあたって、金原 理・後藤昭雄氏から多くの御教示を得た。記して感謝する。

補記 原稿提出後に、後藤氏より、「尚齒会考」(九大図書館蔵)なる写本に、善行七十賀宴詩が採られている由の御示教を賜った。賀宴の尚齒会意識は個人別に詳しく検討する必要があるようだ。